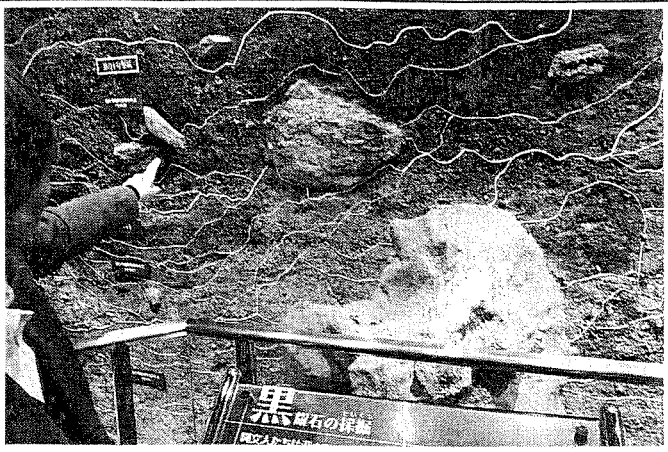

縄文人が実際に掘った採掘坑の実物を切り取り展示する黒耀石体験ミュージアム

信濃 巡って発見

長野

黒曜石できらめく歴史の里

（長和町）

星のようにキラキラと光る黒曜石。旧石器時代から産地だった長和町は、この石を町づくりの中心に据えている。二〇〇八年十月に町の特別シンボルに指定。遺跡や博物館、研究施設を拠点に観光誘致を進める。観光客らに歴史を伝えるボランティアの育成にも六月から取り組む。

「町にとって石はかけがえのないもの。世代を超えて歴史遺産に触れることができる」。国内唯一という黒曜石をテーマにした「黒耀石（こくようせき）体験ミュージアム」の学芸員、大竹幸恵さんは施設を紹介しながら町と石のつながりを解説する。

黒曜石は弥生時代半ばころまで、主に矢尻や石やりなど狩猟道具の材料に使われた。割れ口が鋭く、加工しやすいのが普及した理由だ。黒く半透明で、火山の噴火でできる。町は和田峠や星糞峠などの原産地を抱え、当時は石を目当てに多くの人が集まったという。

「美しく鋭い切れ味が人気で、東北や関西一円に運ばれていた。いわば日本最古のブランド品」と大竹さん。熱のこもる説明に聞き入っていると、太古の世界に誘われるかのような気持ちになった。体験ミュージアムは研究の歩みや石器づくりと流通などに関する展示をしているほか、黒曜石の弓矢やペンダントなどを実際に作ることもできる。

博物館としては、黒耀石石器資料館、原始・古代ロマン体験館もある。さらに、現在も発掘調査が続く史跡公園の縄文鉱山と、二〇〇〇年にできた明治大学黒耀石研究センターが、黒曜石のふるさと長和町を支えている。

体験施設で弓矢作り

明治大の研究センターは毎年夏に企画展を開いている。「石に興味を持つ歴史好きの人が、全国から集まります。町にとって大きな財産です。博物館と協力してもっと研究成果を発表していきたい」と特別嘱託の山科哲さん。

町には中山道の旧宿場町もある。様々な時代の歴史に触れることができるとあって、全国からの観光客が増えている。

明治大と連携し、町は「歴史ボランティア育成プロジェクト」を始動させた。六月から全十九回のカリキュラムを組み、観光客らに石はもちろん、宿場などについてもガイドできる人材を育てる。教育委員会の丸山輝人・教育課課長補佐は「歴史の町として受け入れ態勢を整えたい」と意気込む。

町にはスキー場や広大な牧場があり、自然を生かしたグリーンツーリズムも盛んだ。信州・長和町観光協会の藤田健司事務局長は「石を柱に、より多くの観光客を呼び込みたい」と話す。地元からは「黒曜石文化を世界遺産に」という声も上がってきた。太古の石の輝きは、あせることなく、今も町をきらめかそうとしている。

（村田文教）

H21年5月21日
日本経済新聞

☎ 長野 026-232-2111
松本 0263-36-3007